

木漏れ日の

スマイル

写真・文

津島修三

〈秋田市在住〉

中国・福建省惠安は白御影石の一大産地として有名で、採石場・加工工場の集積には目を見張るものがあるのだとか。

由利本荘市岩谷(いわや)町(旧大内町)で書店を営む高橋喜一郎さん(昭和2年生まれ)は、平成元年に惠安を訪れて、その場でいきなり千体の手彫りのお地藏さんを「注文」してしまった。

「亀田と岩谷を結ぶ県道の折渡(おりわた)し峠に、いつか千体地藏をお祀りしたいという夢はあったんです。そのことが昭和の3年に新聞で紹介されると、構想も具体化する前に寄進者が現われて、もう引込みがつかなくなってしまうんです」と喜一郎さんは笑う。その後も新聞で紹介されるたびに全国から問い合わせが殺到し、わずか2年で千体分の寄進が集まり、「折渡千体地藏」の満願となった。

折渡峠にはもともと地藏尊が祀られていた。由利地方の名僧として名高い是山和尚が建立した折渡地藏尊で、別名「子守り地藏」とも「イボとり地藏」とも。「なぜか分からないんだけど、本当にイボが取れるんです」と、喜一郎さんも嬉しそうに言う。お地藏さんの前に供えられた丸石を持ち帰り、イボのあるところをさすっていると不思議なほどにイボが取れてしまう。イボが取れたら、石を倍にしてお返ししてお詣りする決まりなのだとか。そして、「子守地藏」と呼ばれる由縁にも気休めの域を超えたものがある。大仙市南外のEさんという女性は、折渡地藏尊にお詣りのご利益でめでたく家にお嫁さんを迎えることができ、そしてお孫さんも授かった。そのせめものお札にと、お仲間と一緒に千体地藏に赤い頭巾と腹掛けをこさえてあげた。千体分の頭巾と腹掛けは毎年新調され7月〜8日の折渡地藏まつりの前にEさんたち自身の手によって掛けかえられている。それがもう10年以上続いている。

実は、折渡千体地藏には、もう一つの意味がある。

喜一郎さんは、大戦中を海軍軍人として過ごした。戦争というものの悲惨さを、最も身近に見てきた人間の一人だった。たとえ中国でも、多くの邦人が二度と故郷の地を踏むことなく大陸の露と消えている。そのような人たちの魂を、お地藏さんの姿を借りて日本に帰してあげたい、というのが、喜一郎さんの切なる願いであったのだ。

そうして見れば、木漏れ日の中のお地藏さんの顔立ちには何かとても穏やかなものがあるように、感じられるのである。

山の中の峠道にある千体地藏を不気味だという人もいるが、むしろここにはとても優しく穏やかな空気が流れているのではないだろうか。折渡地藏尊の子授けの“ご利益”もなかなかのものなのだとか

